

## 送別の辞

丸山徳次先生は昨年一月に六八歳になられ、大学の規定によって本年三月末日をもって退任されることになりました。先生はこれまで龍谷大学に三七年間お勤めになり、教育・研究に多大な貢献をなさってきました。そのご尽力にたいしまして、ここに心からの尊敬と感謝の気持ちを表す次第であります。

哲学教室では主として哲学と倫理学の分野を担当していただきましたが、先生は現象学研究を基盤にして、現象学の視点からする現代の科学技術批判のための方法論的研究をされるとともに、「環境倫理学」「水俣病事件」「里山学の提唱」など、非常に幅広い分野にわたって探究の範囲を広げ、きわめて活発な研究活動を展開されてきました。周知のように、現象学はその創始者のフッサールの「事象そのものへ」というモットーにも示されているように、日ごろの通念や臆見を廃して事柄それ自体の実相を直に探究し、問題の根底にまで理解を深める、という目標を掲げた哲学です。しかし、その目標を私たちの生きる現実の世界の中での実際の「事象そのもの」へと肉薄して、具体的分析的成果として提示しようとしている現象学者は、国の内外を問わずきわめて少数であるといわざるをえません。龍谷大学における先生の教育・研究の四〇年近い年月は、そうした稀なる真の現象学者の努力の日々であったといえるでしょう。

教育や研究、あるいは大学運営にかんする先生の人に抜kindでた熱い思いについては、先生の讜咳に接することのできた人の誰もが感じてきたことであり、その思いを己を省みる時々鏡として大切にしている人も多いと思います。私自身は、先生の同僚として勤めた期間は長くはありませんが、もともと岩波書店の「新・哲学講義」と「応用倫理学講義」シリーズがほぼ平行して刊行された時期から、その環境倫理の巻に強く印象づけられておりました

ので、同僚になって身近に社会や政治の問題について直に先生のお話を伺い、時には意見を戦わせることは、本当に貴重な時間でした。

これからは先生のお話を聞くことのできる機会が、これまでほど頻繁ではなくなるかもしれませんが。このことは非常に残念なことです。しかし、先生の「事象そのもの」へと迫る気迫は、大学を離れてますます研ぎ澄まされ、熱いものになっていくことと固く信じております。先生のご健勝とご研究の更なる進展とを、哲学研究室の一同とともに、心よりお祈りいたします。

二〇一七年一月

伊藤 邦武